

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	山 口 県
-------	-------

学校の概要 (平成15年4月現在)

学校名	柳井市立新庄小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13	18
児童数	54	54	47	56	49	51	1	312	

研究の概要

1 研究主題

主体的に問題解決活動に取り組む児童の育成～個に応じた指導の工夫～

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 5年生・国語 児童の実態として、理解の状況に差があると思われるため ・ 5年生・算数 児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため これまでの研究成果と児童に対する実態調査の結果から ・ 6年生・国語 学校として当該教科に関する研究実績があるため ・ 6年生・算数 児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため これまでの研究成果と児童に対する実態調査の結果から
--

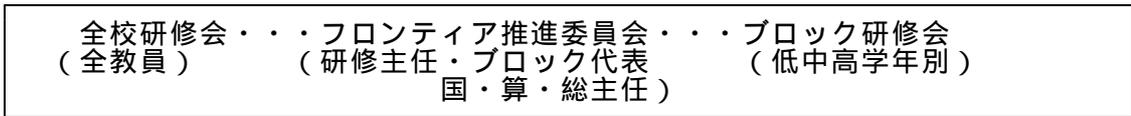
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 主体的に問題解決活動に取り組む児童の育成 ～個に応じた指導の工夫～</p> <p>仮説 単元計画・単元評価表をセットにして立案し、指導の工夫と評価を一体的に展開して授業を改善することによって、単元における児童の学習成果が上がるであろう。</p> <p>研究の内容・方法 実践を通して、単元モデル・単元評価モデルを作成する。</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 主体的に問題解決活動に取り組む児童の育成 ～個に応じた指導の工夫～</p> <p>仮説 単元計画・単元評価表に基づいた実践を累積することによって単元における児童の学習成果は高まるであろう。</p> <p>研究の内容・方法 実践を通して、単元計画・単元評価表を累積し、確かな学力向上カリキュラムを作成する。</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 主体的に問題解決活動に取り組む児童の育成 ～個に応じた指導の工夫～</p> <p>仮説 確かな学力向上カリキュラムに基づいた実践を行うことによって児童に「主体的に問題解決活動に取り組む」ことができる総合的な学力がはぐくまれることであろう。</p> <p>研究の内容・方法 学力検査等を実施し確かな学力向上カリキュラムを評価・改善する。</p>
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1 研究の成果

< 成果 >

6年算数及び5年国語の具体例を以下に述べる。

6年 算数「体積を極めよう～体積～」(学年・課題別、教員4人)

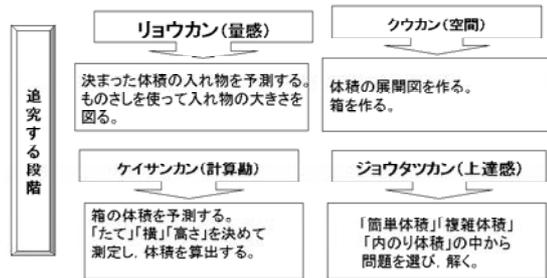
ア 課題設定の工夫

本単元は、昨年度の実践を追試し、改善を加えたものである。

まず、課題設定については昨年は3コースであったのに対し、本年度は4コース設定した。コース設定は図1の通りである。体験活動を取り入れた「リョウカン(量感)」「クウカン(空間)」「ケイサンカン(計算勘)」のコースと3種類のプリントがステップアップする「ジョウタツカン(上達感)」のコースを設定した。

図1

6年 算数(体積を極めよう)



イ 時間設定の工夫

7モジュール(1モジュール20分)の中で全てのコースを回る。7モジュール目は45分の中で自由に活動し、自己認識、自己評価、自己決定力の育成をめざす。(図2)

「ジョウタツカン(上達感)」コースは、1単位時間の中で必ず1回は学習するようにする。体積の計算や文章題を解く学習にくり返し取り組むことにより、計算方法の定着を図る。

図2 学習形態

(印はある児童が選択したコースの例)

時間	モジュール(20分)	リョウカン(量感)	クウカン(空間)	ケイサンカン(計算勘)	ジョウタツカン(上達感)
1	1				
	2				
2	3				
	4				
3	5				
	6				
4	7				

ウ 自己認識・自己決定にかかわる支援

自己認識できるよう、各授業の終わりに自己評価や相互評価をさせ、それをもとに次時の活動を自己決定させる。自己決定が難しい児童には、具体的な認識例題をあげるなどして、教師が支援をする。

エ 評価

単元の中で評価基準、評価規準を設定し、単元評価表を作成した。単元計画の中に位置づけ、評価した結果が評価の推移のグラフ(図3)である。今回は、計算練習の場を3回以上体験するという学習を設定したので、表現処理については、かなりレベルアップした。評価を総括すると、92%の児童がB以上に到達

図3 評価の推移

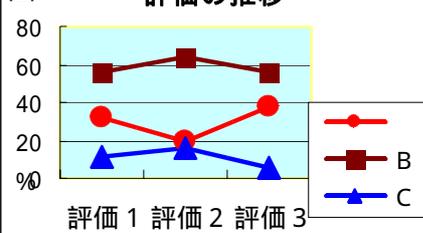
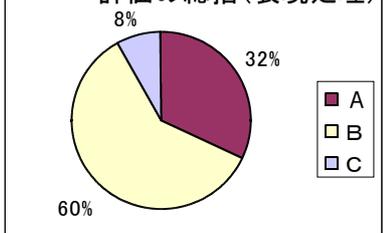


図4 評価の総括(表現処理)



できた。(図4)

5年 国語「考えを整理して表現しよう」
(学年・課題別・習熟度別、
教員3人)

ア コース設定の工夫

課題別少人数指導と習熟度別少人数指導を取り入れたコースを設定した。(図5)

設定したのは、次の通りである。

<追究する段階>

「**どんどんコース(自主学习)**」

「**がちりコース(自主学习・教師支援)**」

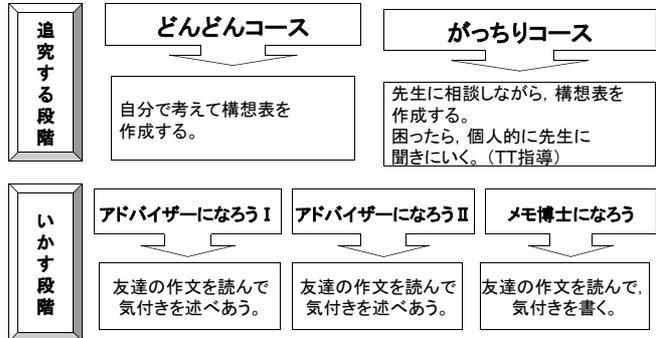
<いかす段階>

「**アドバイザーになろう(話し合い活動)**」「**アドバイザーになろう(話し合い活動)**」「**メモ博士になろう(メモ用紙に意見を書く活動)**」を設定した。

<追究する段階>の「**がちりコース**」では、TT指導を行い、つまずきの見られる児童に個別に支援が行えるようにした。<いかす段階>では、習熟度に応じてグループ編成をしている。話すことに抵抗を感じない児童で構成された「**アドバイザーになろう**」「**アドバイザーになろう**」と、話すことに抵抗のある児童で構成された「**メモ博士になろう**」の3つのグループに分けた。児童の自己選択に任せたが、途中での変更も認めため、意欲的に学習に取り組んでいた。

図5

5年 国語(考えを整理して表現しよう)



イ グループ編成・指導体制の工夫

TT指導と少人数指導の形態を流動的に取り入れた。各グループに教師が一人ずつつく場合、1つのグループをTT指導で行う場合など、児童の実態や授業の展開に応じて、指導スタイルを流動的に変えた。また、児童の意識調査やレディネステストなどにより、グループ構成も適宜変え、所属するグループも児童の自己選択に任せたので、児童の意欲を持続することができたのではないかとと思う。

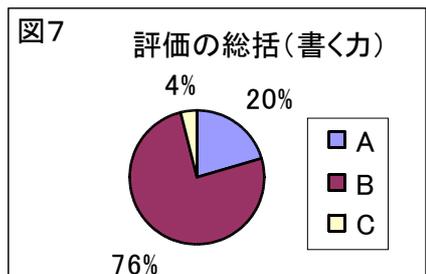
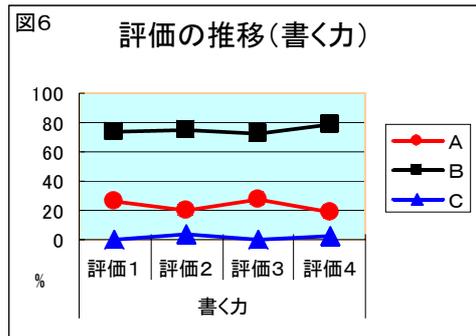
ウ ヒントカードやワークシートの工夫

個に応じた指導の工夫として、<追究する段階>では、コースごとに提示するヒントカードやワークシートを工夫して作成した。「**どんどんコース**」は、自力で取材カードをもとに構想表が作成できるよう、ヒントカードを提示した。「**がちりコース**」では、児童がなるべく抵抗を感じることがないよう、細かなアドバイスを添えた構想表を用意した。それでも、うまくできない児童に対しては、教師の支援を仰ぐよう助言した。

エ 評価

各評価の推移は図6の通りである。

評価1は取材カードの作成、評価2は構想表作成、評価3は作文、評価4は推敲の学習における評価の実績である。本来であれば、Aの児童が終盤になるにつれ、増えていくことが望ましいが、国語の場合それぞれの過程での活動の難易度が必ずしも同等でないため、比較することは難しい。また、評価4においては、推敲で難易度の高い活動であったため、Aランクに到達した児童は少なくなるとは考えない。図7の評価の総括をみると、96%の児童がB以上に到達し、Cの児童を極力減らすことができたことがこの単元における成果



であったと言える。

意識調査についての考察

本年度、学力向上フロンティアの取組について、意識調査を実施した。対象は、4～6年の児童及びその保護者である。

ア 児童の意識調査結果より

児童に対してのその調査結果の一部をここで紹介する。質問事項は、国語・算数に関して「好きか」「得意か」である。(図8、図9)

図8 意識調査1

質問事項

「国語(算数)は好きですか。」

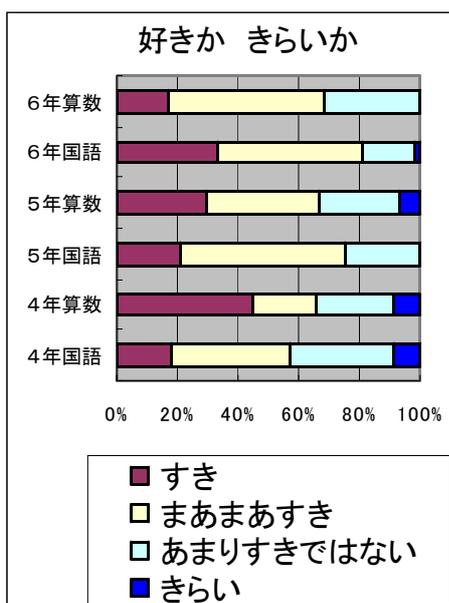
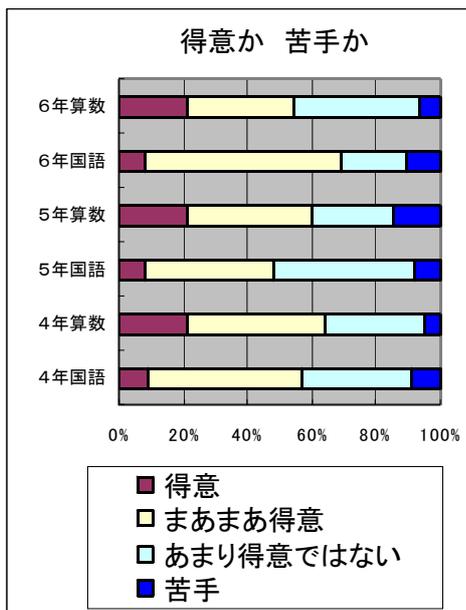


図9 意識調査2

質問事項

「国語(算数)は得意ですか。」



- ・ 4年生は、算数では「好き」と答えた児童がほぼ半数いるのに対し、「得意」と答えた児童は、四分の一に満たないことがわかった。
 - ・ 5年生では、国語が「好き」「まあまあ好き」と答えた児童が75%もいるのにもかかわらず、「得意」「まあまあ得意」と答えた児童は半数を切っている。こうした意識のずれをどう縮めていくかが今後の課題となる。
 - ・ 6年生は、国語を「好き」「まあまあ好き」と答えた児童は80%以上いた。5年生と同様、「好き」と答えながらも「得意」と答えた児童はかなり減っている。算数では「きらい」と答えた児童がいなかった。
- 以上の結果をまとめてみると、次のようなことがわかる。
- 「好き」と答えた児童に対し、「得意」と答えた児童が少なくなっている。
 - 国語では「好き」と答えた児童でも「得意」と思わない者の割合が高い。これは「できた」「わかった」ということがわかりにくい教科の特性ではないかと思われる。
 - 5年の国語、6年の算数は「きらい」と答えた者がいない。6年の国語も「きらい」と答えた者は一人であった。これは、昨年度より実施している国語の教科担任制、国語や算数のTT指導・少人数指導も一因となっているのではないかと思われる。

イ 保護者の意識調査結果より

保護者の方からは、記述式で次のような意見をいただいた。

少人数指導やTT指導は今後も続けてほしい。ただ、課題のコース選択をする場合、児童の自主性に任せているようであるが、自分の判断で果たして的確な選択ができるのか不安である。

教科担任制も続けて欲しい。中学校への連携として大切なことである。

「読む力」「書く力」「計算力」を定着させてほしい。

<課題>

新庄評価モデルの作成

- ・自己評価チェックシステムの開発を行う。
個の学力の把握（個人カルテの作成）
- ・国語科における読み・書きの到達レベルの明確化を図る。
全学年の「音読」の到達目標一覧表の作成
全学年の「作文」の到達目標一覧表の作成
- 新庄プランの作成**
 - ・課題別と習熟度別の学びのバランスを考慮した単元開発を行う。
（従来の実践の追試、改善、新しい単元の開発）
児童の意欲を高める単元の開発
 - ・国語科と生活科、国語科と総合的な学習の時間のマッチングの単元開発
- 確かな学力の育成**
 - ・基礎学力の定着
ワークシートの開発（基礎・基本を身につけるため）
評価方法の開発（児童の学力を確かに評価するため）
 - ・学力のリンク
教科、領域相互の学力のリンク（リンクする学力は何か）
- 実践の評価**
 - ・学力検査を実施する。今年度の結果をもとに追跡調査し、学力の伸び具合を調べる。
 - ・児童や保護者に対する意識調査
本年度と同じ内容で実施し、比較検討する。

学力等把握のための学校としての取組

学力検査
平成15年6月実施
対象学年 3～5年（来年度 対象4～6年 追跡実施）
意識調査
平成15年10～11月
対象学年 4～6年の児童及びその保護者
少人数指導については、授業参観を設定し、その後調査用紙を配布

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- * 新年度学校便りにて説明（平成15年5月） 保護者、地域へ配布
- * 少人数指導の授業参観の実施（平成15年10月、11月）
保護者、地域、近隣の学校へ連絡
- * H Pにて情報公開（常時）
昨年度の研究発表公開、本年度の校内研修会の様子を公開
本年度の研究発表も公開予定
- * 校内研修会の公開（平成15年11月、12月）
市内のフロンティアスクール校との連携
- * 管内フロンティア事業地区協議会にて説明（平成16年1月） 研究発表
- * 研究集録の配布（平成16年3月予定） 関係機関

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 ～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無